

# バトンのゾーン

「きょう子さん、今までみんなのご飯を作ってきたけど、もう私はここまで。今日からは、きょうさんが作って」

と、義母に言われたのは、結婚数年後に同居してから、13年目のことだった。

義母は、料理上手で、私たちの共働き子育てを、長年支えてくれていた。

編集記者として、毎晩のように遅く帰る私に代わり、孫を見て、食事も作ってくれていた。フリーライターになってからも、同じように。その子供たちも、中学生と小学校高学年になっていた頃のことだった。

並木 きょう子  
(フリーライター)

義母の言葉を聞いた私は頭がガンとして、「あの、リレーには、バトンタッチするゾーンってあると思うのだけど、お母さん、今回、それって、ありますか？」

と、質問した。陸上のリレー選手が、バトンを受け継ぐとき、お互いに全力で走りながらバトンタッチをする姿を思い浮かべながら。

13年間も続けてきてくれた、義母からの家族全員のご飯作りというバトンは重く、一緒に走るゾーンがほしいと。義母は、すぐに私の心を察してくれて、笑いながら、

「きょうさんに、たくさんは期待していな

いから、そんなに意気込まなくて大丈夫よ。簡単でいいから、自分でできる料理から始めれば…」

と、もう作らない覚悟を決めた話し方。

明日から、義父母と私たち夫婦と子ども二人

## 並木 きょう子（なみき・きょうこ）



1948年、東京生まれ。1971年、国学院大学文学部卒業。同4月主婦の友社入社。主婦の友編集部記者11

年を経て、フリーライターに。主に女性と仕事をテーマに、人の生き方を描く人物ルポ、エッセイを執筆。著書にエッセイ『ごちゃまぜ同居進行曲』（主婦の友社刊・TBS系テレビでドラマ化）、人物ルポ『喝采―いま輝く明治・大正の女たち』、『人生き・ら・ら』（以上、主婦の友社発売）、エッセイ『300字の小さな幸せレシピ』（アップオン刊）。

の6人分を、朝昼夕、作る。仕事は、しばらく、スローダウンしよう。

メニューを作り、買い物に行き、冷蔵庫に入れて、買い忘れないか、指差し確認。今ままで、義母が揚げている天ぷらの揚げたてを、横に行つては、つまんで食べていたのに。

ああ、ついに親に甘えていた生活から、義母のように「立っているだけで立派な主婦！」になる日が来てしまった。どうしよう。

でも、私にも意地がある。それで、「おいしい！」と家族をうならせる料理を作ろうと、レシピを見ながら、大作に挑んだ結果、家族は夜の8時になつても出来上がらない夕食を待つことになり、義母が、

「お父さんと私は、いただいた佃煮とお茶漬だけでいいから」

などという事態に。

義父は、夕食準備の時間になると、台所に来てウロウロ。お父さんに手伝えることはないかと、そつと聞いてくれた。

「きょうは、料亭のおだしの取り方を真似して、本格的にやってみますから」

などと私が大まじめにいうのを聞いて、二人は、ため息をついていたに違いない。

しかし、人間は、やればできるし、進歩もする。おいしいものが大好きで、それが自分でできるという料理作りは私の性分に合っていて、できる料理が増えていった。義母の味も覚え、義母がある日「きょう子さん、もう私の味は、免許皆伝よ」と喜んでくれた。

義父母は、自分たちの部屋で（それをうちでは、松の間と呼んでいたが）テレビの大相撲など見ながら、夕食を待っている。

「松の間の皆様、夕食ができました」と、私が声をかけに行くと、二人は、

「やっぱりカレーのにおい！」とか、「五目寿司、大好物だよ」と、うれしそうな顔で食卓に並び、おいしそうに食事した。

振り返ると、食卓はいつもドタバタしていたが、家族の誰かの笑い声が聞こえていた。

そして今、私は息子と息子の妻と二人の孫のために、仕事の時も、自分が何かやりたいことがある時も、共働きの若い一家を支えられたらと、義母と同じように料理を作っている。コロ

ナで、おうちご飯が多くなって、この二年間は特にがんばっている。

息子一家は徒歩500歩のところに住んでいるが、駅に近い我が家は通り道で、ご飯ができている限り、みんな寄って食べて帰る。

先日、息子一家が来るとわかっていたのに、私が出先から、遅くなって帰ることがあった。出来合いのものを買って帰ると、息子の妻が嬉しそうに、

「あつ、お母さん、お帰りなさい。今、ウーバーイーツで何か取ろうと、携帯見ていたところだったんです」と言う。

「間に合ってよかった、ギリギリセーフ」

と私。何十という店から選べる料理の宅配なんて、私の時代にはなかったなあ：多少やれやれと思いつながら。

時代は違っても、きっと義父母に、私も同じようなことを言い、たくさん、やれやれと思わせたのだろう。義父母は、一度も怒ることも、いやな顔をすることもなく、30年余り、面白がつて、私に付き合ってくれた。

さて、息子の妻に、私のご飯作りのバトンを、  
渡す番である。義母が、バトンを渡したその歳  
を、私も過ぎた。

が、人生は百年時代に入ったから、もう少し  
がんばれるかもしれない。

それと、この頃気づいたことがある。ご飯の  
バトンは、姑から嫁へだけでなく、家族の「世  
代から世代へ」と引き継いでいくものになって  
きたのではないかと。

義母から受け継いだ後、時代は動いた。

これからは、息子の妻だけでなく、息子にも、  
走者になってもらいたい。幸い料理好きだ。義  
母と違って、バトンを渡すほうの私が、いまい  
ちどっしりしていないが、息子の妻、息子にも、  
しっかりと渡そう。

その時は、バトンのゾーンを長めにとろうと  
思っている。